

(エ) 論文要旨

論 文 要 旨	
申請者氏名	田坂康浩
申請学位	博士（言語教育学）
主論文題目	「気になる表現」が社会的に認知されるに至るまで
主論文要旨	〔邦文は4,000字以内 外国語は2,000語以内〕
<p>本論文は、以下の 6 章で構成される</p> <p>第1章 序論 第2章 総論 第3章 各論（1）敬称「さん」の組織名等への多用と敬意の揺れ 第4章 各論（2）「しかない」の多用の実態と「違和感」の理由 第5章 各論（3）元気、やる気、勇気のやりもらい考 第6章 結論</p> <p><b>第 1 章 序論</b></p> <p>本稿は、2020 年前後に筆者が日常生活において見聞きした「気になる」言葉、「違和感」のある表現について、まず現状を捉えることを目的としたものである。</p> <p>近年、日常生活で多く見聞きするようになった「気になる表現」、自分自身が「違和感」を持って接している表現、具体的には、①「法務部さん」といった組織名や、「協会さん」や「2 社さん」といった組織名以外への「さん付けの多用」、②「感謝しかない」、「可愛さしかなかった」といった対比するもののない単なる強調表現としての「しかないの多用」、そして、③元気、勇気、やる気を与えたり、あげたり、くれたり、もらったりする「気のやりもらい」表現の 3 つに焦点を当て、その起源と範囲等を調査することとした。</p> <p><b>第 2 章 総論</b></p> <p>第 2 章ではまず、文化庁が 1995 年度より毎年実施している「国語に関する世論調査」の結果を分析した。文化庁は、これまで 28 回実施した「国語に関する世論調査」を通して、社会状況</p>	

の変化に伴う日本人の国語に対する意識や理解の現状について明らかにしてきた。

その中でたびたび「国語の乱れ」に対する国民の意識について調査を行っている。初回調査の1999年度から2019年度までの20年間の国語に対する意識の変化をその調査結果から追うことができる。本調査では何をもって「乱れ」と言うかについて定義していないものの、1999年度に調査対象の約86%だった「国語が乱れている」との回答率が、20年後の2019年度には約66%と20%ポイント低下した。これは、国語の乱れがなくなってきた訳ではなく、「言葉は時代によって変わるものだと思うから」と言葉の変化を肯定的に捉えることが多くなったためと考えられる。しかし、それでも調査回答者全体の約三分の二は国語が乱れていると捉えており、これが現在の日本語の立ち位置（日本語母語話者の認識）である点に留意が必要であることを筆者は指摘した。

次に、言葉の変化の捉え方に関する先行研究を行った。具体的には、敬語史に焦点を当て、敬語の分類、素材敬語の変化、対者敬語の成立、被支配待遇から対者敬語への流れ、及び尊敬語から対者敬語への流れをまとめた上で、敬語の使い方、若者言葉、新語・流行語の多用の実態に係る先行研究をまとめた。

その上で、筆者は、「変化の過程」状態にある言葉を扱うに当たって、「言語的視点」の立場を取り、『乱れ』と意識されやすいことばの、形式や運用面での特徴を明らかにしたいと考え、対象となる語の本来的な意味・用法と乖離した形で用いられている現状、具体的にはその経緯、範囲、程度について明らかにすることを目的に据えた。

### 第3章 各論（1）敬称「さん」の組織名等への多用と敬意の揺れ

第3章では、「組織名等へのさん付け」を取り上げた。

国会会議録による用例検索結果から、組織名への「さん付け」は戦後すぐの国会での発言に既に用例が見られるように決して新しいものではないこと、団体名に「さん付け」することもある旨の語釈は、ようやく20世紀の終わりから今世紀にかけて、一部の国語辞典で見られるようになったこと、本研究で用いた金融庁審議会を対象としたコーパスの分析結果においては、2010年以降、増加傾向が見られることが判明した。

この「組織名等+さん」の使われ方については、①発言者が自身の発言で組織名等に「さん付け」する際、対象となった全ての語に「さん」を付けているかどうかを分析した結果、約4割は対象となった全ての語を「さん付け」していないこと、②「さん付け」の対象者が同席している場合には同席者への「配慮」が見られ、組織名に「さん付け」されることが多いこと、また、同席者以外について「さん付け」する場合、そこには、発言者と何らかのつながり又は利害関係があり、「配慮」する必要があるとの意識が働いていると考えられるが、そうした例は限定的であること、③「さん付け」対象を列挙した場合、その一部にしか「さん付け」しないこと、具体的には「みずほさん、三菱さん、三井住友さん」と言わずに「みずほ、三菱、三井住友さん」とする用例が対象の約三分の一もあり尊敬語としての機能に欠ける点があることも判明した。そのため、「組織名等+さん」は、「慣用」の段階（四分の三くらいに使われる段階）にまでは至らず、

まだ「揺れ」の段階にあり、併せて、自分の品格を保持する「美化語」的な役割が敬称「さん」に強まっていると結論付けた。

#### 第4章 各論(2)「しかない」の多用の実態と「違和感」の理由

第4章では、対比する語のない、単なる強調として用いられている「名詞+しかない」の多用の実態を取り上げた。

「しかない」の多用に対する「違和感」は、否定される他者を暗示していないことに起因しているほか、「〔否定表現と呼応して〕話し手にとって狭いと意識される範囲（少ないと感じられる数量）に限定されることを表わす」、「それでは〈よくない／不十分だ〉という語感がある」という規範的な用法を逸脱していることが、「違和感」の生じる要因となっていると考えられる。

「違和感」のある「名詞+しかない」は、いわゆる「打ち言葉」に多く見られた。「打ち言葉」で書かれたブログを調査した結果、2010年代に「違和感」のある「しかない」の使用が増えたと結論付けた。

#### 第5章 各論(3) 元気、やる気、勇気のやりもらい考

第5章では、元気、やる気、勇気の3つの「気」のやりもらいに焦点を当てた。

「気のやりもらい」については、いまだに「違和感」を覚える人が多い。しかし「元気を与える」や「勇気を与える」との表現は2000年代以降に顕著に多く出現するようになったものの、初出は、「勇気を与える」が1895年に、また「元気を与える」は1899年に見られる非常に古い表現であることが分かった。

古いこの「気のやりもらい」表現に対する「違和感」は、まずは「元気」、「やる気」、「勇気」がやりもらいをする対象物かとの点にもあるが、動詞にその主要因があると考えられる。具体的には、「与える」については、その語釈に「自分の所有する物を目下の相手に渡しその者の物とする」とあり、「元気」や「勇気」を与える本人がこの表現を用いると、相手や聞き手に不快感を引き起こし、それが「違和感」につながるおそれがあること、「あげる」についても、語釈は「利益になるものを、自分またはだれかが、自分以外にあたえる」、また、「(自分の力では得ることができないもの)に何かを与える」とあり、与えるものを有している側に優位性が感じられ、併せて、これを受け取った側の利益を測りにくい「気」を与えることに、「違和感」の原因があると考えられる。「くれる」については、物を移動させる主体（主語）が意思のない「人以外」である点に「違和感」があるものと考えられる。最後に「もらう」については、「他人」と「自分」という「相対する当事者の存在」に欠ける表現が多いこと、また、「もらう」で表されるものの移動に対する相手方の関与が感じられないことが、「違和感」の所在の理由と考えられると結論付けた。

#### 第6章 まとめ

第6章では、これまでの議論をまとめるとともに、①日本語教育への示唆、及び②今後の課題

に言及した。

### ① 日本語教育への示唆

本稿で取り上げた「気になる」表現、すなわち「さん付けの多用」、「しかないの多用」及び「気のやりもらい」は、いずれも日本語学習者用のテキストには記述がない。これは、「さん付けの多用」は「揺れ」の段階にあり、また、「しかないの多用」は「誤用」の段階にあり、規範的な用法ではないことによるものと考えられる。また「気のやりもらい」については、授受表現の学習の中心は、物理的に受渡しが可能な「もの」の授受を通して、「あげる」、「くれる」、「もらう」という日本語の特徴的な3つの動詞体系を理解し、併せてこれらの授受動詞を補助動詞として使った表現を習得することであることから、取り上げられていないと思われる。

しかしながら、日常生活において多く見聞きするこれらの表現について、日本語学習者は自ら積極的に用いる必要はないものの、書かれているものを読み、話された表現を聞いた際に正しく理解できるよう、例えば初級の段階を終えた学習者に対して、友人との会話や街中、マスメディアで多用されている“街で見聞きする表現”として、理解のポイントと使用に際しての留意点を整理した上で教授すれば、理解促進の一助となると考える。

### ② 今後の課題

第3章については、「さん付け」多用の起源の解明、具体的には「関西起源説」に関する調査・分析を行うと共に、「さん付け」と前接語のモーラ数の関係について解明すること、第4章については、「打ち言葉」の用例を広く集め、「違和感」のある「～しかない」の表現がいつ頃から使われ始めたのかを特定すること、第5章については、書き言葉の用例検索による日本語の使用状況や変化を分析する上で、既存のデータベースの活用と併せた、長期の一貫したコーパスの開発・利用による比較・分析を行うことを挙げた。

しかしながら一番の課題は、「誤用から揺れ、慣用の段階を経て正用」に至る流れの「誤用」や「揺れ」の段階にあるこれらの事例が、いつ、どのようにして「慣用を経て正用」に至るか、それを見極めるために、言葉が眼前で変化している過程を把握し分析することであると考えられる。